

2007年能登半島地震現地調査報告

Field survey of the 2007 Noto Hanto Earthquake around the western coast of Noto Peninsula, central Japan

中村 克 [1]; 吉岡 正 [2]; 小坂 英輝 [3]; 三輪 敦志 [4]; 鎌滝 孝信 [5]

Masaru NAKAMURA[1]; Tadashi Yoshioka[2]; Hideki Kosaka[3]; atsushi Miwa[4]; Takanobu Kamataki[5]

[1] 応用地質 ; [2] 応用地質; [3] 環境地質; [4] 応用地質; [5] 応用地質

[1] OYO Corporation; [2] Oyo; [3] Kankyo Chishitsu Co.,Ltd; [4] OYO; [5] none

平成 19 年 3 月 25 日午前 9 時 42 分に、能登半島北西岸の深さ 11km を震源とする地震 ($M_j=6.9$) が発生し、能登半島周辺に人的および物的被害をもたらした。筆者らは、地震の発生に起因する地表変形を確認・観察するため、地震発生直後の 3 月 26 日から 31 日までの 6 日間の現地調査を行い、地震によって発生した断層変位の可能性のある地変を数地点確認した。本講演では、調査の概要報告とその結果に対する考察を行う。

調査範囲は余震分布域をもとに選定し、輪島市門前町周辺とした。調査内容は、本震の発震機構が高角度逆断層型であると推定されることを考慮して、右横ずれあるいは短縮変形が連続して確認することに着目し、それぞれの調査地点においてルートマップを作成した。

門前町道下地区の数地点で、道路の舗装面、川のコンクリート河床、護岸などの構造物に約 2~5cm の圧縮性の変状がみられた。これらの圧縮性の変状がみられる地点をトレースすると、余震分布域と調和的である。

以上の結果に基づくと、門前黒島の沿岸域から勝田地区へと少なくとも海岸から 1km の範囲で変形が発生している可能性がある。